

## 岩明均『寄生獣』論

～田村玲子は、なぜ笑顔で死ぬことができたのか～

3年8組 6番 漆原 陸

### I はじめに

1990年から月間アフタヌーンに掲載された岩明均の漫画『寄生獣』は、連載当初から今なお不朽の名作として愛されている大傑作である。同作は近年アニメ化や映画化を受け、再び世間の注目を集めることとなった。一見すると、派手なバトルシーンのあるただのSF漫画のようだが、もっと深く大きく難解な主題が隠されている。本稿では『寄生獣』を論考するにあたり、以下の手順に沿って行きたい。第一に『寄生獣』という漫画のあらすじを紹介しながら、物語を深く読み解くための鍵となる謎を示す(第II章)。次に謎を解き明かすためにそのキャラクターの発言の謎を解く(第III章)。さらにそのキャラクターが最後どうなったのかを理解し(第IV章)、最後に深く読み解くための鍵となる謎を解く(第V章)。

### II 『寄生獣』と田村玲子

はじめに、『寄生獣』のあらすじを紹介する。主人公は泉新一、少しひ弱な男子高校生である。両親やヒロインである村野里美と、平凡だが平和な日常を送っていた。だがそこにある日、天から謎の生物が降ってくる。これが、寄生生物である。寄生生物は人間の首から上に寄生してその身体を思いのままに操り、餌として同種の他個体、つまり人間を食べるという生命体である。寄生生物は本体の細胞を自由に変形させたり硬質化させたりすることができ、また宿主の潜在能力を限界まで引き出すことができるため、高い戦闘能力をもつ。新一も寄生生物に寄生されそうになるが、彼の場合脳は奪われず、右手部分に寄生されてしまう。そしてその寄生生物、右手に寄生したことからミギー、と新一との奇妙な共生関係が始まる。寄生生物は冷徹で超合理的な意思決定を行う生き物である。優しさなどといった感情は持ち合わせていない。そのため、彼らが新一とミギーを見つけると、人間の脳が残っていることから、同種ではない危険な存在だと判断し、有無を言わず殺しにかかってくる。ミギーは新一が殺されてしまっても自分も栄養補給ができずに死んでしまうため、必死で防戦する。かくして、新一とミギーは、寄生生物に対抗するという運命を背負ったのである。一方で、寄生生物の中にも個性豊かな者たちが登場する。特に哲学的な問いを常に発し続ける田村玲子<sup>1)</sup>は、物語を深く読み解くためには必要不可欠な存在である。この田村玲子は、作中で劇的な死を遂げる。なんと、微かな笑みを浮かべながら死んでいく<sup>2)</sup>のである。先述したとおり寄生生物は感情を持ち合わせていないため、無意識に表情が出ることはない。まして死に際に笑顔などももちろんありえないことである。では田村玲子は、なぜ笑顔で死んでいったのだろうか。本稿で考察していく。

### III 田村玲子が最後に解いた、1つの答えとは何か

#### (1) なぜ田村玲子は死んだのか

<sup>1)</sup> 初登場時の名前は田宮良子だが、田村玲子と名乗っている期間の方が長いので、本稿ではこちらを用いる。

<sup>2)</sup> 岩明 前掲書 第6巻 p.224

「今日また1つ……疑問の答えが出た……」<sup>3</sup>これは、ひかり第一公園で平間たち警察に銃弾を浴びせられ、自らの死を覚悟した田村玲子が新一に対して言った言葉である。田村玲子が言う、疑問とその答えは作中では明らかにされていない。それは、何だったのだろうか。

田村玲子は自身を持つ高い知能や研究の成果によって、女性の肉体に寄生しているという弱点を補うほどの高い戦闘力をもつ。そのことは、田村玲子が草野ら三体の寄生生物にリンチを受けた際に、寄生生物が出す脳波や人間を利用した特殊な戦い方で形勢を逆転し勝利した<sup>4</sup>ことや、後藤の「例えばおれをつくりあげた『田村玲子』あのくらいのヤツとならなかなかの戦いのできたかもしれんのだが……」<sup>5</sup>という発言からもうかがえる。それでは、そこまで強い田村玲子が、なぜ死んだのだろうか。田村玲子は留守中に、当初は「何かの実験に使えるだろう」<sup>6</sup>とまで言っていた自身の子供を、田村玲子によって妻子を殺されたと勘違いしている探偵、倉森によって誘拐されてしまう<sup>7</sup>。倉森の置手紙によってひかり第一公園に誘われた田村玲子は、自身の子供を殺そうとする倉森を殺し、自身の子供を守るのである<sup>8</sup>。大衆の前で倉森を殺せば、自らの命を危険にさらすことになるにもかかわらず、なぜ自身の子供を守ったのだろうか。寄生生物がかわいいのは自分の身だけのはずである<sup>9</sup>。殺される際の「だが……まさか化け物のおまえがな……（中略）おどろい……た……ぜ……」<sup>10</sup>という倉森の言葉に対し、田村玲子は「自分でも驚いているわ……」<sup>11</sup>と返している。この発言から、田村玲子自身にとっても自らより子供の命を優先した行動が想定外だったということがわかる。田村玲子が倉森と対峙しているとき、田村玲子の波長を感じとったミギーは次のように思っている。

何だ この波長は…… こんなのは初めてだ たしかに田村玲子の「脳波」には違いないが……  
いままでの「仲間」でこんな変わった波を出すヤツはいなかった……  
いったいどういう「感情」なんだ……？<sup>12</sup>

田村玲子の発した脳波を理解することができず、ミギーが混乱していることから、このときの田村玲子の「感情」は、本来寄生生物たちが持ち合わせていないものだということがわかる。自らの命を危険にさらしてまで子供を助けようとした田村玲子に芽生えた、本来抱くはずのなかった感情とはいったい何だろうか。無論、母性である。田村玲子は、母親が我が子を思う母性を得たのである。田村玲子が死んだあと、ミギーは次のように思っている。

そんなばかな！！ なぜだ……！ 戦おうと思えば戦えたはずだ！ そして逃げることも……<sup>13</sup>

母性を得た田村玲子が、戦うことと逃げることを自らやめたことが、ミギーの心の声から明らかになっている。また、母性を持っていないミギーが、田村玲子の選択の理解に苦しんでいることもわかる。田村玲子は母性を得たことで子の幸せを一番に考えるようになったため、自分が育てては子供を幸せにすることができないことに気づき、自らの命と引き換えに子供の未来を守ったのである。

---

<sup>3</sup> 岩明 前掲書 第6巻 p.220  
<sup>4</sup> 岩明 前掲書 第6巻 p.88-124  
<sup>5</sup> 岩明 前掲書 第8巻 p.136  
<sup>6</sup> 岩明 前掲書 第1巻 p.240  
<sup>7</sup> 岩明 前掲書 第6巻 p.125  
<sup>8</sup> 岩明 前掲書 第6巻 p.166  
<sup>9</sup> 岩明 前掲書 第1巻 p.88  
<sup>10</sup> 岩明 前掲書 第6巻 p.169  
<sup>11</sup> 同前  
<sup>12</sup> 岩明 前掲書 第6巻 p.164  
<sup>13</sup> 岩明 前掲書 第6巻 p.223

## (2) なぜ田村玲子は新一の母親に擬態したのか

母親が我が子を思う母性を理解した田村玲子は、「人間と寄生生物のちょうど中間」<sup>14</sup>である新一に子供を託す際に、自らの顔を新一の家で見た新一の母親の顔<sup>15</sup>に変化させる。平間たち警察の銃弾を体に浴びながら新一に近づいてくる田村玲子を警戒し、ミギーは新一に注意を促す<sup>16</sup>。そのとき田村玲子は次のように思っている。

さて 新一…… ここで逃げられては困る……  
どうすればおまえを……おまえという人間の心を……<sup>17</sup>

自らの子供を託すために、新一という人間の心をどうすれば繋ぎ止められるのか、ということ、田村玲子が真剣に理解しようとしていることがわかる。田村玲子が導き出した答えは、新一の母親に擬態するというものだった。その田村玲子の行動に対し、新一は「かあさん……」<sup>18</sup>と反応するが、母性を理解することができないミギーは「だまされるなシンイチ！！ ワナだ！！ 思い出せ！ 胸の穴を！！」<sup>19</sup>と警告する。田村玲子としばらく見つめ合った新一は「……いや」<sup>20</sup>とミギーを左手で抑える。このシーンは、新一の母親を殺し擬態した寄生生物と新一が対峙したとき<sup>21</sup>とよく重なる。そのときは、現実を受け止めることができなかった新一が、警告するミギーを無理やり抑え、それによって新一は致命傷を負ってしまい、これ以降新一は涙が出なくなってしまう。言うならば、新一のトラウマになっていたはずなのである。トラウマのことを占い師の女は「胸の穴」と表現し、「どうすればこの穴……」と尋ねる新一に対して、「会うのよ あなたの胸に穴をあけた相手にもう一度会うの」と答える<sup>22</sup>。その相手は新一と宇田がすでに殺しているため、新一は「……その相手なら殺したよ」<sup>23</sup>と言うのだが、田村玲子の擬態によって母親と再会したことで新一の「胸の穴」は埋められ、田村玲子は新一の心を繋ぎ止めることに成功するのである。田村玲子は新一の心を繋ぎ止めるために、新一側から、つまり子が母親に感じる母性を理解することができたのである。それによって新一は母性を感じ「胸の穴」が埋められ、再び泣くことができるようになる<sup>24</sup>のである。

田村玲子は自らの子を守るために母親が我が子を思う母性を獲得し、新一の心を繋ぎ止めるために子が母親に感じる母性を理解した。田村玲子が最後に解いた一つの疑問の答えとは「母性」だったのである。

## IV 田村玲子は、最後どうなったのか

### (1) 寄生生物とは何なのか

「わたしたちはいったい何なの？」<sup>25</sup>これは、田村玲子が作中を通して考えてきた永遠のテーマである。この問いのために田村玲子は、パラサイト A との子供を作ったり、食べ物を人間と同じものに変えてみたりと、様々な実験を行ったのだが、最終的に田村玲子は次のように述べている。

---

<sup>14</sup> 岩明 前掲書 第6巻 p.134  
<sup>15</sup> 岩明 前掲書 第6巻 p.135  
<sup>16</sup> 岩明 前掲書 第6巻 p.212  
<sup>17</sup> 岩明 前掲書 第6巻 p.213  
<sup>18</sup> 岩明 前掲書 第6巻 p.215  
<sup>19</sup> 同前  
<sup>20</sup> 岩明 前掲書 第6巻 p.217  
<sup>21</sup> 岩明 前掲書 第2巻 p.82  
<sup>22</sup> 岩明 前掲書 第5巻 p.109  
<sup>23</sup> 岩明 前掲書 第6巻 p.110  
<sup>24</sup> 岩明 前掲書 第6巻 p.234  
<sup>25</sup> 岩明 前掲書 第1巻 p.184

人間についていろいろ研究してみた……

人間にとっての寄生生物 寄生生物にとっての人間とは いったい何なのか

そして出た結論はこうだ

あわせて1つ 寄生生物と人間は1つの家族だ 我々は人間の「子供」なのだ<sup>26</sup>

人間を捕食する寄生生物が人間の「子供」とは、どういうことなのだろうか。もちろん「子供」とは生物学的な「子」という意味ではなく、社会的な「子供」や「子孫」といったことを指している。また、田村玲子は次のようにも述べている。

我々が認識しなくてはならないこと 人間と我々が大きく違う点……

それは人間が 何十 何百…… 何万 何十万と集まって 一つの生き物だということ

人間は自分の頭以外にもう一つの巨大な「脳」をもっている

それに逆らったとき <sup>わたしたち</sup>寄生生物は敗北するわ<sup>27</sup>

つまり、田村玲子は、ある「個人」としての人間ではなくて、人間の「社会」をひとつの有機体として考えているのである。その場合、田村玲子が述べていたことは、人間の「社会」の「子供」というものが、寄生生物たちであるということだと考えられる。これに対して佐倉統は次のように述べている。

子供、とくに胎児は、自分一人では生きていけない。親の保護なしには生きていけない。親から栄養をもらい、あるいは、親の栄養を「搾取」して成長を続けるのが胎児である。(中略) 彼ら／彼女らが栄養を人間(=彼らにとっての母胎)に頼り、人間を搾取するのは、彼らの成長のためには当然のことなのである。通常、胎児が母親の身体の一部を栄養にしているように、寄生虫たちは人間の社会の一部を栄養にする。すなわち、人間を食べる。<sup>28</sup>

非常に恐ろしいことなのだが、これが、寄生生物は人間の「子供」であるということなのである。

## (2) 寄生生物の本能はどこからきたのか

では、「人間を食べる」のはなぜだろうか。「栄養の搾取」にしても、もっとほかにいい方法があるはずである。現に、新一の右手に寄生したミギーは、人間を食べずとも新一から養分を吸収することで生きており、作中の序盤での「お前らだって人間なんか食料にしなくても生きられるんじゃないのか!?!」<sup>29</sup>という新一の問いに対して、田村玲子は「たぶん……可能だろうな」<sup>30</sup>と答えている。また、自身の最後のシーンにおいても、田村玲子は次のように述べている。

これまでに 38 人殺した

おもに食料としてだが……しかしこれは「仲間」の間ではかなり少ない方だ

と言える 足りない分は人間がふだん食べている食事でまかなえた……つまり

<sup>26</sup> 岩明 前掲書 第6巻 p.182

<sup>27</sup> 岩明 前掲書 第6巻 p.32

<sup>28</sup> 佐倉統 『生命をめぐる冒険 進化・ミーム・コンピュータ』(河出書房新社 1998年 p.36)

<sup>29</sup> 岩明 前掲書 第1巻 p.236

<sup>30</sup> 同前

寄生生物は必ずしも人間を食わなくても生存できるということだ<sup>31</sup>

やはり、寄生生物は人間を食べずとも生きていけるのである。人間を殺せば殺すだけ自分たちの行動が明るみとなり、人間社会から注目を浴びるリスクが大きくなる。それにも関わらず、なぜ「人間を食べる」のだろうか。その理由は、作中の田村玲子の次の発言から明らかになっている。

わたしが人間の脳を奪ったとき  
1つの「命令」がきたぞ……  
“この「種」を食い殺せ”だ！<sup>32</sup>

普段は冷静で、感情がない寄生生物らしく、表情を変えることが滅多にない田村玲子が、このシーンだけは目をぎらつかせ、歯をむき出し、獣のような形相に変わっている。それだけこの「命令」は、強いものなのである。この「命令」、すなわち本能によって、寄生生物たちは「人間を食べる」のである。ではこの「命令」はどこからくるのだろうか。同じように寄生生物の本能について、宇田に寄生したジョーは、「おれたち初めは「脳を奪う」ってだけが目的の生き物だったんだ……ともかく脳に向かって進んだ」<sup>33</sup>と述べている。これにより、田村玲子とジョーの発言から、はじめは「脳を奪う」ことが目的だったのに対し、その目的を達成したことで、新たに“この「種」を食い殺せ”という「命令」が下されたということがわかる。そして、「脳を奪う」ことに失敗したミギーとジョーにはその「命令」が下されていないことから、それは人間の脳から下されたと考えられる。これに対し、佐倉統は次のように述べている。

問題は、人間の脳の中に、同種の他個体を殺すという指令が存在するかどうか、だ。もしそれが存在するならば、脳を奪ったとき、その指令がパラサイトたちにコピーされるという可能性は十分ある。／ぼくは、このような情報が人間の脳内に存在するということは、ほぼ間違いないことだと思う。(中略)人間の歴史を振り返ってみても、昔から戦争が絶えたためしはない。人間は助け合う動物であると同時に、殺し合う動物でもあるのだ。<sup>34</sup>

このことから、人間の脳から「命令」が下されたと考えられる。では、寄生生物の初めの目的である「脳を奪う」はどこから来たのだろうか。『寄生獣』には次のような冒頭がある。

地球上の誰かが ふと思った  
「人間の数が 半分になったら いくつの森が 焼かれずにすむだろうか……」  
地球上の誰かが ふと思った  
「人間の数が 100分の1になったら たれ流される毒も 100分の1になる  
だろうか……」  
誰かが ふと思った  
「<sup>みんな</sup>生物の未来を 守らねば……………」<sup>35</sup>

<sup>31</sup> 岩明 前掲書 第6巻 p.181

<sup>32</sup> 岩明 前掲書 第1巻 p.237,238

<sup>33</sup> 岩明 前掲書 第2巻 p.173

<sup>34</sup> 佐倉統 『生命をめぐる冒険 進化・ミーム・コンピュータ』(河出書房新社 1998年 p.30,31)

<sup>35</sup> 岩明 前掲書 第1巻 p.4,5

人間と地球のことを思っている「誰か」とは、いったい誰なのだろうか。この冒頭部分の時点では、まだ人間の天敵となる寄生生物は登場していないにもかかわらず、この「誰か」は人間の生存をも大きく左右させることができるほどの強い存在だと考えられる。寄生生物以外の、人間の天敵ともなりうる強大な存在。それは、田村玲子が述べていた、人間が自分の頭以外にもつもう一つの巨大な「脳」のことである。このすぐ後に寄生生物が登場していることから、これによって「脳を奪う」という初めの目的は生まれたと考えられる。初めの目的を生んだ巨大な「脳」が寄生生物を生んだといっても過言ではないことは、Ⅲ章からもうなずける。ではなぜ、巨大な「脳」は寄生生物を生んだのだろうか。

巨大な「脳」は、人間が地球にとっての「毒」であるということに気づいていたのである。本当は、われわれ人間自身も気づいている。一メートルを超える中型の哺乳類が、地球上に七十億も存在しているという異常さに、気づいているのである。だが、気づいたからといってそれを声高々に言うことはできない。ましてや、数を減らすべきだなどとは口が裂けても言えないのである。だからこそ、先ほど述べた冒頭の主語は「誰か」となっているのである。「誰か」とは、巨大な「脳」を含め、人間が地球にとっての「毒」であるということに気づいた、文字通りの「誰か」のことなのである。そしてその「誰か」たちは、「毒」である人間を減らすための天敵になる、寄生生物の存在を望んでいたのである。本人たちは無意識にも、巨大な「脳」が自分たちの数を減らす天敵を望んでいたならば、「同種の他個体を殺すという指令」が寄生生物にコピーされたのもうなずける。

村野里美を人質にとった際に、浦上は新一に次のように投げかける。

寄生生物どもが人間を殺すなアわかりやすいただの食事だ……でもこの俺アなんだと思う？

いや……たぶんおまえにやわかってるはずだ おれこそが人間だと

なんでおれ以外の人間はこうガマン強いのかねえ

人間てなもともとお互いを殺したがってる生き物だろ？

大騒ぎしすぎなんだよ みんな血に飢えてるくせしやがって

自分の正体もわからねえ人間がおれに文句を言う

……………でもおれは ひと目で寄生生物と人間を識別できちまう

現代がどんだけ不自然な世の中かもわかる

寄生生物なんざ必要ねえのさ！

人間はもともととも食いするようにできてるんだよ 何千年もそうしてきたんだ！

それをいきなりやめようとするから 50億にも 60億にも増えちまう

このままじゃ世界がパンクしちまうぜ

みんなウソつきだがおめえは違うよな？

おれみたく正直になれよ<sup>36</sup>

人間が殺し合う動物であるということに、今の世界の異常さに、浦上は気づいていたのである。また

<sup>36</sup> 岩明 前掲書 第8巻 p.233-235

市役所での戦いで、市長である広川は議場で次のように述べている。

……今回は君たちの勝利と言っていいだろう　こと「殺し」に関しては地球上で人間の右に出るものはない  
しかし　きみたちがいま手にしている道具はもっと別の……………　さらに重要な目的のために使われねばならん  
つまり……　生物界のバランスを守るためにこそ  
きみたちの本来の仕事さ  
「間引き」だよ  
もうしばらくしたら　人間全体が気づくはずだ  
人間の数をすぐにも減らさねばならんということに……  
もうしばらくしたら　……………「殺人」よりも「ゴミのたれ流し」の方がはるかに重罪だということに気づく  
そして……もうしばらくしたら我々という存在の重要さに気づき　保護さえするようになるはずだ  
きみらは自らの「天敵」をもっと大事にしなければならんのだよ  
そしてこの天敵こそは美しい大自然のピラミッドにぴったりとおさまる！　人間の1つ上にな！  
それでやっとバランスが回復する！  
……地球上の誰かがふと思ったのだ……………  
みんな  
生物の未来を守らねばと……<sup>37</sup>

広川はずっと寄生生物だと思われていたのだが、このあと人間によって殺されたときに、実は人間だったということが発覚した。広川は人間が地球にとっての「毒」であるということに気づいた人間だったのである。死んだ広川を見て後藤は「広川か……最後までよくわからんやつだったな／田村玲子がこの人間を面白がっているいろいろな計画を立てたわけだが……それもこれですべて終わった／おまえらから見てもかなり珍しいんだろう？　こういう人間は」<sup>38</sup>と広川を殺した人間たちに尋ねる。この発言から、後藤が広川の考えを理解していなかったことと、田村玲子は理解していたことが読み取れる。先ほどの場面、広川は死ぬ前に次のようにも述べている。

環境保護も動物愛護もすべては人間を目安とした歪なものばかりだ　なぜそれを認めようとせん！  
人間1種の繁栄よりも生物全体を考える！！　そうしてこそ万物の霊長だ！！  
正義のためとほざく人間！！　これ以上の正義がどこにあるか！！  
人間に寄生し生物全体のバランスを保つ役割を担う我々から比べれば  
人間どもこそ地球をむしばむ寄生虫！！  
いや……寄生獣か！

「人間に寄生し生物全体のバランスを保つ役割」、いうならば親である人間の罪を償う役割をもって生

<sup>37</sup> 岩明　前掲書　第7巻　p.182-184

<sup>38</sup> 岩明　前掲書　第7巻　p.191

まれてきた子こそ、寄生生物なのである。生殖能力もなく、人間の数を減らすための天敵としてのみ生まれたことを踏まえれば、高い戦闘能力も、それなのに田村玲子が「我々はか弱い」と表現していたこともすべて納得がいく。そして、作中に「寄生獣」という言葉が出てくるのは、広川のこのセリフのみである。「寄生獣」とは人間に寄生する寄生生物を指していたのではなく、地球に寄生する人間たちを揶揄した言葉だったのである。

寄生生物の「脳を奪う」という初めの目的は人間社会がもつ巨大な「脳」によって生まれ、「“この『種』を食い殺せ”」という「命令」は巨大な「脳」の一部である、まぎれもない人間の脳から下されていたのである。つまり、寄生生物の「人間を食べる」という行動は、食欲ではなく「攻撃性」によってもたらされ、「人間を食べる」ことでなく「人間を殺す」ことを目的としていたのである。それは、“この『種』を食い殺せ”という「命令」が寄り集まった結果、後藤が「戦いを求め続ける戦闘マシン」<sup>39</sup>に変貌したことからも明らかである。

寄生生物の「攻撃性」が人間の脳からコピーされていたのは非常に悲しいことだが、その代わりに重要な事実も明らかになった。それは、佐倉統が述べている最後の一文、「人間は助け合う動物であると同時に、殺し合う動物でもあるのだ」のことである。つまり、人間は助け合う「優しさ」と、殺し合う「攻撃性」を持ち合わせた動物だと言い換えることができる。そして、その「攻撃性」だけが、寄生生物たちに「命令」としてコピーされたのである。

このことから、この章の本題である「田村玲子は最後どうなったのか」という問いの結論を導き出すことができる。Ⅲ章で記したとおり、田村玲子は最後、自ら母性のなぞを解くことに成功している。いうならば、八代嘉美が、「ただ、田宮良子は身ごもり子を育てることで、個の生を優先するパラサイトでありながらも母性に近いものを獲得していたように思える」<sup>40</sup>と述べるように、母性という「優しさ」を獲得したのである。つまり、人間の脳を奪ったときにコピーされた「攻撃性」と、母性のなぞを解いたことで獲得した「優しさ」を併せ持つことで、寄生生物から「人間」に近づくことができたのである。

## V 『寄生獣』から見える、人間という生物

田村玲子は死に際に次のようなことを言って去っていく。

ずうっと……考えていた……  
……わたしは何のためにこの世に生まれてきたのかと……  
1つの疑問が解けるとまた次の……疑問がわいてくる……  
始まりを求め……終わりを求め……考えながら  
ただずっと……歩いていた……  
どこまで行っても同じかもしれない……  
歩くのをやめてみるならそれもいい……  
すべての終わりが告げられても……  
「ああ そうか」と思うだけだ<sup>41</sup>

田村玲子はずっと考えてきたのである。考えて考えて、そして「人間」に近づくことで、笑顔で死ぬことができたのである。作中で幸せな最期を迎えることができたのは田村玲子だけである。探究心を持ち、考え、子孫を残し、未来に託す。本来の人間のあるべき姿ともいえる存在に田村玲子は近づき、人

<sup>39</sup> 岩明 前掲書 第8巻 p.166

<sup>40</sup> 『ユリイカ 1月臨時増刊号 第46巻第16号(通算654号)』(青土社 2014年 p.192)

<sup>41</sup> 岩明 前掲書 第6巻 p.219,220



間の理想的ともいえる人生を送ることができたのではないのだろうか。その田村玲子は最期に「……………この前 人間のまねをして……………／鏡の前で大声で笑ってみた……………／……………なかなか気分が良かったぞ……………」<sup>42</sup>と言う。人間と寄生生物の両方を完全に理解した田村玲子が、最後に人間を肯定するのである。なぜ最後に田村玲子は、新一にこんなことを言ったのだろうか。『寄生獣』の最後、ミギーの意識は長い「眠り」につく。その後しばらくしてミギーは意識の中で新一に次のように語りかける。

ある日道で……  
道で出会って 知り合いになった生き物が  
ふと見ると死んでいた  
そんな時なんで悲しくなるんだろう  
そりゃ人間がそれだけヒマな動物だからさ  
だがな それこそが人間の 最大の取り柄なんだ  
心に<sup>ひま</sup>余裕がある生物 なんとすばらしい！！<sup>43</sup>

初期は人間が「悪魔」にいちばん近い生物とまで言っていた<sup>44</sup>ミギーもまた、人間を肯定するのである。この時新一は浦上に人間とは何かを諭され、また村野を助けられなかったと思い、悲しみに絶望している。その意識の中にミギーがやってきて、人間を称賛し、村野を助け新一に預ける。ミギーのおかげで、新一は救われたのである。田村玲子は、まさにこれがしたかったのではないだろうか。新一に、「人間はそんなに悪いものではない」と伝えたかったのである。だが、田村玲子には時間がなく、また当時の新一はまだ田村玲子の思いを理解できていなかったため、それは叶わなかった。当たり前だが、われわれは人間以外の生物と言葉を交わすことがなく、また人間以外の生物の立場から人間を見ることもできない。なので、人間がどんな生物なのかを知ることができないのである。田村玲子は、天敵の立場から人間を、そして子の立場から親を、知り、考え、そして認めたのである。『寄生獣』はこのような側面から見れば、「人間を再肯定する物語」だと捉えることができるのである。

(9759 字 原稿用紙 24.4 枚相当)

#### 【参考文献】

- ◆佐倉統 『生命をめぐる冒険 進化・ミーム・コンピュータ』(河出書房新社 1998年)
- ◆『ユリイカ 1月臨時増刊号 第46巻第16号(通巻654号)』(青土社 2014年)

<sup>42</sup> 岩明 前掲書 第6巻 p.222

<sup>43</sup> 岩明 前掲書 第8巻 p.251-253

<sup>44</sup> 岩明 前掲書 第1巻 p.90